

登場人物表

島野 高志	(19)	大学2年
佐伯 賢二	(43)	鬼熊組若頭
鬼熊 巖雄	(67)	鬼熊組親分
渋谷 信夫	(38)	鬼熊組組員
渋谷 咲也	(30)	信夫の弟
桐山 翔	(35)	ラウンジピアノリスト
鬼熊 叶愛	(26)	巖雄の一人娘
鬼熊 麻美	(49)	巖雄の亡き妻(写真)
田中 治	(30)	叶愛の婚約者
西口 亮輔	(20)	大学3年 高志の先輩
戸田 聖樹	(20)	大学3年 高志の先輩
千林 桃	(19)	大学2年 高志の同級生
島野 まり	(41)	高志の母
島野 義輝	(44)	高志の義父
島野 空	(3)	高志の妹
塚井 美晴	(28)	桐山の恋人
土井 葉子	(36)	桐山の元恋人
その他	組員たち、大学の友人たち	
喫茶店の店員、弁当屋の店員、披露宴司会者		

本文

○大学構内（夕方）

7月のセミの声がにぎやかな緑の多い構内のどこからかピアノトリオ（ピアノ・ベース・ドラム）のアップテンポのジャズのサウンドが聴こえている。

○大学内サークル部屋 同時刻（夕方）

入口に「ジャズ研究会」の看板。

流れている音楽の出どころ。

アップライトピアノの鍵盤を弾く手元、ベースの弦を弾く手元、ドラムを叩く手元。それぞれ激しく演奏している

1/123

その音楽をBGMに。

○佐伯マンション（夕方）

玄関にきちんと揃えて脱いだ靴。

物の少ない整理整頓された部屋。

スーツをきちんと着てサングラスを掛

ける鬼熊組若頭の佐伯賢二（43）

○鬼熊組事務所（夕方）

何人かの組員がいる。

鬼熊巖雄（67）が事務所のデスクで顔をしかめて何か考え込んでいる。

○大学構内 外 同時刻

学生の千林桃（19）が歩いている。途中から駆け足でサークル棟へ向かう。

○大学内サークル部室 同時刻

しばらく熱心に演奏している三人。

アップライトピアノを無表情で弾く、

島野高志（19）。一緒に演奏している

ベースの西口亮輔（20）、ドラムの戸

田聖樹（20）

演奏が終了する。

終わってもピアノに向かい浮かない表情で何か考え込んでいる高志。

西口「うん、ええ感じの曲やん」

穏やかな口調の西口。

戸田「次のライブで出来るんちゃう？」

軽いノリの戸田。

西口「うん、せやな。ほなそろそろ時間やから今日はこれで終わるか」

楽器を片付け帰り支度を始める西口と

戸田。

高志「あの…、（戸田に）ドラム、テーマのことはもっと譜面に沿ってやってももらえますか」

戸田「ん？あー俺けっこう遊んでまうからな」

戸田ふざけたように笑う。

西口「別にあの感じでもええんちゃう？おもしろいやん」

高志「あんまり自由にやられ過ぎると俺の書いたイメージと離れてまうから決めてる所はちゃんとやって欲しいんですけど」

戸田「そんな堅いこと言うとったらジャズなんかやってられんで」

西口「でもまあ作曲者の意見は尊重したろ」

戸田「あー、次は氣いつけてやってみるわ。

まあ、オレのパッションが制御出来たらやけどな」

戸田、西口おかしそうに笑う。

不満顔の高志。

西口「ところで島野、前から気になつとったんやけど、俺らとやっててあんまり楽しないん？」

高志「…え？」

西口「なんか…、なんていうかなあ…、ちょっと距離ある感じ？俺等と」

高志「…どういう事ですか？」

戸田「俺もちよつと思た」

高志「・・・」

西口「なんか、島野に壁を感じてまうねん。

もしかしてまだ俺らに気つこてるん？」

高志「…え…、いや…別に…」

西口「そうか…。いやな、もうユニット組んで1年経つし、先輩後輩関係なく演奏に遠慮は無用やで。それと…、指もよう回って上手いんやけど、もうちよつと戸田と俺の

音聴いてくれたらもつと俺らのサウンド
良くなると思うんやけどな」

高志「聴いてますけど…」

西口「うーん。なんていうかな、島野は一
人でズンズン先に行つてまいよる気がす
るねんな。気持ちが」

高志、ちよつと面倒くさそうに、

高志「ちゃんとテンポは合つてると思いま
すけど」

西口「うん。それは合つてるで。フレーズも
かつこええし、…んやけど、そういう事や
なくて、俺らをもうちよつと島野の中に受
け入れて欲しい…みたいな」

高志「・・・」

西口「いや、まあ、俺も上手く言えへんけど
な。ま、とりあえず、俺ら今からメシいく
けど島野も一緒に行かへん？」

高志「あ…、いえ今日バイトあるんで」

戸田「バイト、今日夕方からなん？」

高志「いえ十時からですけど」

戸田「ほなちよつとくらい行けるんちゃう？」
高志「いや、バイトまでに用事もあるんで」
西口「ふーん、そーかあ。まあ：ほな、また
の機会にな」

戸田「ほんじゃま、おつかれ！」

そこに息を切らしてやってくるサーク

ル仲間のボーカル千林桃。

千林「あー、終わっちゃいました？」

西口「お、桃ちゃん。今からここ使うん？」

千林「いえ、西口組がまだやってたら1曲だけ練習させて貰おかと思ったんですけど」

戸田「西口組で！やくざみたいな言い方せん
といてよ、柄悪そうで嫌やわ。一応

『Spacelike infinity』っちゅうユニット名

があるねんから」

千林「それ覚えにくいんですもん。西口さんがリーダーやから西口組でいいですよん」

西口「あはは、別にええけどな。でももう俺ら片付けてもたわ。島野のピアノで練習する？」

千林「そっかあ、じゃあまたでいいです」

西口「そう？ ほな俺ら帰るな」

戸田「桃ちゃんまたな」

千林「お疲れ様です！」

西口、戸田、部屋を出ていく。

高志、ため息をついて荷物をまとめる。

○大学構内 外 同時刻

高志と千林、並んで歩いている。

楽しそうな千林とテンション低い高志。

千林「さっき外で聞こえてたんやけどあの曲、

島野君の新しいオリジナル？」

高志「うん」

千林「かつこいいやん。何ていうタイトル？」

高志「まだ決めてない」

千林「そうなん？ じゃあ私が名付け親になっ

たげよか？」

高志「別にどっちでもいいけど」

千林「ほな…、『さすらいの島野』とかどう？」

高志「だっさ。本気で考える気無いやろ」

千林「なんでよ、かつこええやん」

高志「そんなタイトル、ライブで曲紹介ようせんわ」

千林「きやはは！ええやん！『次の曲はさすらいの島野です』って自分で言うん超ウケる」

高志「ネタにしてるやん」

千林「関西人は常にネタを持つとかな！ライブはエンターテイメントなんやし。絶対またライブでやってよ！私行くから！で、その時私も1曲歌わせて！」

高志「歌うんはええけど」

千林「てか、今更やけど、島野君はなんで音大行かんかったん？」

高志「オレのピアノは独学やから音大なんか合格できん」

千林「えー？あんな上手いのに？」

高志「それに音大は金がかかる」

千林「うーん。それは確かに」

高志「県立大のジャズ研で十分や。元々大学

も行けるとは思てなかったし」

千林「……。でも、ジャズピアニスト目指してるん？」

高志「それはないやろ。ピアニストなんか食べていける職業ちゃうしな」

千林「そっかぁ……。厳しい世界ですなあ」

高志「……」

千林「あ、そや。なあなあ、島野君は夏休みって何するん？」

高志「別に何もせえへん」

○高志のアパート外 同日（夕方）

駐輪場に自転車を止める高志。

そこに高志の義父、島野義輝（44）も徒歩で帰宅し、にこやかに声を掛ける。

義輝「高志くん！おかえり！おんなじ時間に帰宅なんか奇遇やなあ！」

高志「ただいま」

愛想なく返事してさっさとアパートに向かう高志。

苦笑いで付いていく義輝。

○高志のアパート 同時刻

高志、鍵を開けて入ってくる。

続いて義輝が入ってくる。

義輝「ただいま」

高志、脱いだ靴をきちんと揃え直す。

義輝、入ってきた向きのまま靴を脱ぎ
そのまま玄関を上がる。

空「パパおかえりい」

高志の妹、島野空（3）が玄関に出て
くる。

横をすり抜けるように中に入り、手洗
いうがいをしに洗面所へ向かう高志。

台所で高志の母、島野まり（41）が夕
食の準備をしている。

空を抱っこして居間に入ってくる義輝。

義輝「あー腹減ったあ」

まり「お疲れ様！今日早いね！」

義輝「今日は定時退社出来たからな」

高志、無言で居間に入ってくる。

まり「あ、高志おかえり！今日バイト、何時に出るん？」

高志「9時半頃（まりと目を合わさず）」

まり「じゃあ夕食7時半でいい？」

高志「うん」

高志、そのまま自分の部屋へ行く。

○高志の部屋 同時刻

年季の入った電子ピアノと勉強机など
シンプルで整理整頓された部屋。

かばんを置いてすぐに電子ピアノの前に
座りスイッチを入れヘッドホンを装着する高志。

無表情で弾き始める。鍵盤の音だけが
カタカタと鳴っている。

突然の異音に手を止めると、横で妹の
空が楽しそうに鍵盤を叩いている。

高志、顔をしかめヘッドホンはずす。

高志「ちよっと、あかんで」

高志、空をどかせようとする。

空「空もやりたい！音鳴らして！」

高志「今練習してるからまた今度な」

空「いやや、今やりたい！空も練習する！」

無理やり乱暴に鍵盤を叩く空。

高志「あかん言うとうやろ！」

無理やり空の手をピアノから離す。

顔をしかめ泣き出す空。

空「うわああん、空もやりたいっ！」

慌てて部屋に入ってくる義輝。

義輝「空、にいに忙しいからこっちおいで。

パパとままごとしよ」

空「いやや、ピアノ弾きたい！」

義輝「あっちでパパにご飯作って」

義輝、空を無理やり抱きかかえ、高志に目配せをして部屋を出ていく。

ため息をつきベッドに寝転がる高志。

居間から空のぐずる声と義輝のなだめる声が聞こえる。

高志、イライラを抑えるように頭から

布団を被る

○商店街（夕方）

歩きながらスマホで話している佐伯。

佐伯「はい。わかりました。すぐ行きます」

険しい顔で足を早める佐伯。

○鬼熊組事務所 同時刻

「任侠道」の文字の前に座っている強

面の鬼熊組親分、鬼熊巖雄。目を閉じ

険しい表情。

佐伯が入ってくる。

組員たち「ご苦労さんです！」

佐伯「どないしたんですか」

巖雄「おう、賢二。まあ：、座れや」

佐伯、ソファに座る。

巖雄、手を振って他の組員を払う。

頭を下げて出ていく組員たち。

巖雄ゆっくり歩いて佐伯の隣にぴった

りくっついて座る。

佐伯、その密接具合にとまどう。

巖雄、佐伯の様子にはお構いなしに煙草に火を付け自分で吸おうとするが、口をつけたのを佐伯へ、

巖雄「あ、吸うか？」

佐伯「いや、自分のあるんで」

巖雄「そうか」

巖雄、険しい表情で深く煙を吸い込む。

佐伯「親分…、極秘事項で何なんですか？」

巖雄「ん、…ああー」

佐伯が自分の煙草を咥えると、勢いよく巖雄がライターの火を差し出す。

佐伯「…！すんません…」

巖雄「賢二」

佐伯「…はい」

巖雄「お前…、ギター弾ける言うとったよな」

佐伯「ギター…ですか？はあ、若い頃にちょっとやってたくらいですけど…」

巖雄「（被せるように）今も弾けるか？」

佐伯「今ですか？最近には弾いてないんで…」

巖雄「弾けるやろ？練習したら」

佐伯「…まあ、多分…、多少は…」

巖雄、佐伯の方に向き直り。

巖雄「賢二…。ワシと…、バンドしてくれ」

佐伯「…え？バンド？…て…」

佐伯、自分のベルトを見る。

巖雄、佐伯の顔を向き直させて、

巖雄「そつちと違（ちご）て」

佐伯「あ、親分の？」

巖雄のベルトに手を伸ばす佐伯の手を握り、

巖雄「（佐伯の目をまっすぐ見て）みんなで音楽するやつ」

佐伯「みんなで？」

○巖雄自宅 客間 日中（巖雄回想）

結婚の報告をしに実家に来ている巖雄の娘、鬼熊叶愛（26）が、陰悪な雰囲気
で巖雄と向かい合って座っている。
叶愛の隣には婚約者の田中治（30）も

居心地悪そうに座っている。

巖雄「まあ二人で決めとんやったら好きにしたらええやないか。どうせワシの言うことなんか聞くつもりないんやろ」

叶愛「こないだ友達の披露宴行った時、新婦のお父さんが短い期間にめっちゃめっちゃ練習して一人でピアノの弾き語りしてはったわ。そういうこと、パパに出来る？」

巖雄「そんなものの何がええんや」

叶愛「ウソやろ。そんな事もわからんの！？」
巖雄「ふん！ほんなもんワシやったらピアノの弾き語りみたいなシケたもんやのーで、派手にバンド引き連れてって歌（うと）た
るわ！」

叶愛「はー！？それほんまやな！？」

巖雄「ほんまや！」

叶愛「ほなやってもらおうやんか！ほんまにバンド組んで弾き語りしてよな」

巖雄「おうっ！バンドでもチンドン屋でも連れてったるわい！」

叶愛「チンドン屋は違う」 （回想終わり）

○鬼熊組事務所 同

巖雄「…まあ、そういうことだな」

佐伯「お嬢さん長い事連絡とれなかったん違うんですか」

巖雄「それが突然結婚報告や。それはでもないでもええんや。それよりバンドや」

佐伯「（考え込む）プロのミュージシャンでも発注したらどうです？」

巖雄、深くため息をつき、

巖雄「…それがやな」

○巖雄自宅 同（巖雄回想）

巖雄を凄い形相で睨みつける叶愛。

叶愛「言うんですけど、お金に物言わせて適当にプロ雇うて済ますとかいうのはあかなでな。それはカラオケとおんなじやからな。パパがバンド作るんやで」 （回想終わり）

○鬼熊組事務所 同

佐伯「・・・（頭をかく）」

巖雄「あいつ、どこで覚えたんかドスきかせた脅し方してきよって」

「父親譲りやろ」と言いたいが飲み込む佐伯。

佐伯「そんなこと言うてもどないするんですか。バンドなんか急に出来るもんと違いますよ」

巖雄「そやからお前になんとしてくれ言うとんやないか」

佐伯「適当にプロ雇って友達や言うといたらどないです」

巖雄「あの娘にそんなカマシが通用する思うか？無理無理無理！すぐ見破りよるで。このワシが啖呵切ったからにはもう後には引けんのや。ようわかつとるやろ」

佐伯「・・・」

巖雄「とにかく早急にバンドメンバー集めてくれや。披露宴は十月三日や」

途方に暮れた表情で壁のカレンダー
を見る佐伯。カレンダーは7月（下旬）。

○繁華街 同日（夕方）

険しい顔で歩く佐伯。

巖雄 M「くれぐれも内密にやってくれよ。こ
の鬼熊巖雄がバンド練習してますいう噂
なんか流れたら格好つかんでな」

開店前のスナックから出てくる渋谷信

夫（40）強面の仏頂面。

渋谷、佐伯に気付いて、

信夫「ご苦労さんです」

佐伯「信夫、ちよつとええか？」

信夫「はい」

○喫茶店 同時刻

向かい合って座っている佐伯と信夫。

信夫はお手拭きでゴシゴシと顔を拭い
て丸めてテーブルに置く。

佐伯はお手拭きで丁寧に手を拭いた後

たたみ直してテーブルに置く。

店員「レモンスカッシュの方」

信夫が手を上げる。

店員、レモンスカッシュを信夫に、佐伯にアイスコーヒーを置いて去る。

佐伯「で、話っちゅうんがな」

信夫、レモンスカッシュを勢いよく吸い込み飲み干してグラスを置く。

佐伯「あ、レスカのおかわりいるか？」

信夫「いや、ええです」

佐伯「そうか……。信夫、お前昔バンドでべー

ス弾いてた言うてたよな？」

信夫「：はい」

佐伯「今も弾けるんか？」

信夫「たぶん。そんな難しなかったら」

佐伯「そうか。そんな難しいことはせえへん」

佐伯、前のめりになってコソッと、

佐伯「俺とバンドやらへんか？」

信夫「：ゲッ？（え？）（げっぷが出る）」

○繁華街裏道 同日（夜）

佐伯と信夫が歩いている。

佐伯「くれぐれも口堅い奴言われとるから」

信夫、無言で暗い路地に入っていく。

ついて行く佐伯。

信夫、ライブハウスの裏口前に止まり、

信夫「ちよっと待っててください」

信夫、一人で中に入っていく。

怪しい路地を見渡しながら煙草に火を付けて待っている佐伯。

しばらくして中から「なんやねん！やめろや！」と叫び声がして、ドアから

渋谷咲也（30）が飛び出てきて地面に転がる。その後に出てくる信夫。

咲也「いったいなあ（痛いな）、なにすんねん！

蹴り飛ばすことないやろ！」

信夫「佐伯さん、こいつドラム叩けます」

佐伯「え？」

咲也「いきなりなんやねん！？」

信夫「お前に仕事や」

咲也「はあ？！」

信夫「いつまでもヤク中みたいな奴らとつるんで金にもならん事やつとらんと、ちゃんとドラム叩け」

咲也「仕事ってなんの仕事やねん」

信夫「バンドや」

咲也「バンド！？」

信夫「期間限定やけどな、ちゃんとギヤラ払（はろ）てくれるらしいから」

咲也「ギヤラ？なんぼくれるんや？」

佐伯「それはお前の働き次第や」

咲也「（佐伯を見て）誰やお前」

信夫、咲也に蹴りをいれる、

咲也「痛っ！」

信夫「ワシが世話になつとる人や。口の聞き方に気いつけえ」

咲也「いちいち蹴るなや！あほか！」

信夫「佐伯さん、こんな奴ですがドラムは一応ちゃんと叩けます。こいつでもええですか？」

佐伯「（少し不安げに）信夫が言うんやったら
大丈夫やろ」

信夫「余計な事もしやべらんようによ言う
て聞かせときますんで」

佐伯「その辺はしつかり責任持ってたのむで」

信夫「はい」

佐伯、咲也の前にしやがみ、

佐伯「名前、なんて言うんや？」

咲也「んああ？（睨む）」

信夫、咲也を蹴ろうとする、

咲也「あー！もうわかったからすぐ蹴りいれ

んな！さきや！渋谷咲也！」

佐伯「渋谷？」

信夫「あ、俺の弟です」

佐伯、男前の咲也と厳つい顔面の信夫
を見比べて、

佐伯「ぜんぜん似てへんな」

信夫「父親が違うんで」

○繁華街 同日（夜）

歩きながら話している佐伯と信夫。

佐伯「弟、ミュージシャンやっとなか？」

信夫「まあ、ミュージシャンなりたかったみたいですけどそれだけでは食うていけないので女に食わして貰いながらブラブラしとりますわ」

佐伯「そうか、音楽で食べていくんは難しいんやろうな」

信夫「腕は悪ないんですけどね。十年くらい前に一緒にバンドやっとなった事あったんですわ。そのうち俺は組に入れてもらたんでバンドはそれっきりですけど」

佐伯「そうか……」

信夫「母親がだらしのない女やったんで、二人目の親父と離婚した後は俺がほぼ親代わりみたいにして弟の面倒見とったんです」

佐伯「弟かわいがったんやな」

信夫「まあ、仕方無しにです」

佐伯、煙草に火をつけて、

佐伯「あとは、キーボードや。信夫キーボー

ド弾けるやつ知らんか？」

信夫「それはちよつと……。咲也に聞くのも不安ありますし」

佐伯「しゃーない、時間もないし、あそこ行ってみるか（顔をしかめて）」

○ラウンジ 同日（夜）

ピアノの生演奏が流れている高級なラウンジ内でホステスに接待されている
佐伯と信夫。ママがやって来る。

ママ「賢ちゃん、久しぶりやねえ。今日は親分さんは一緒やないの？」

佐伯「今日は親分の遣いみたいなもんや」
ママ「あら、そうなんやね？」

佐伯、店のグランドピアノを弾いている
甘いマスクの桐山翔（35）を見る。

ママ「何かリクエストする？」

佐伯「いや、ええわ。ピアノ弾いとる男は桐山いうたな？」

ママ「ああ、そう。桐山先生と知り合い？」

佐伯「まあちよつとな」

× × ×

休憩時間の桐山が佐伯の席にやって来る。

ママ「あ、桐山先生、どうぞ」

ママ、席を空ける。

桐山「佐伯さんお久しぶりです」

にこやかに挨拶する桐山。

佐伯「ああ、休憩時間に悪いな」

桐山「いいえ。何かお話があるとか」

佐伯「ちよつとまあ座りいや」

佐伯の隣に座る桐山。ママも隣に座る。

佐伯「何か飲むか？」

桐山「じゃあ、1杯頂きます」

佐伯「おんなじのんでええか？」

ホステスが水割りを作る。

佐伯「最近どないしとんや？仕事もうまいこといっとんのか？」

桐山「ああ、まあ仕事はボチボチです。前やつとった事も足洗（あろ）て、今は一人の

女一筋で一緒に暮らしてます」

佐伯「そうか。足洗（あろ）たんやな。それがええ。ええ加減な事しとったら女は怖いでな」

桐山「そうですね（苦笑）で、話いうのは？」

佐伯「ああ：（ママを見る）」

ママ「私、席外しときましょか」

佐伯「おう、そないしてか」

ママ「ほなごゆつくり」

ママ、ホステスを促し席を立つ。

佐伯「他でもない鬼熊親分の頼みなんやけど」

桐山「親分の？」

○鬼熊組事務所

巖雄「桐山で、あの結婚詐欺紛いの事やつとった奴か？」

巖雄と佐伯が二人で話している。

佐伯「今はもう足洗（あろ）たそうです」

巖雄「ほんまか。まあ、もう辞めとんやったらええわ。女は怖いでな。あいつも根はエ

エやつやのに何を間違う（まちごう）たか
しょうもない事で問題起こしよって、一回
面倒見たった事あったなあ」

佐伯「桐山も言うてました。親分には恩義が
あるから喜んで手伝わさせてもらいます
いうて」

巖雄「そうか。それで一応メンバーは揃たん
か」

佐伯「はい。で、何の曲やるんですか？」

巖雄「ワシな、考えてみたんやけどな。タイ
ガスとかスパイダーズとかがええ思と
んのや」

佐伯「グループサウンズですか？」

巖雄「それや」

佐伯「お嬢さんはそれで納得しますかね」

巖雄「ほんなもんワシかてやった事もない弾
き語りせなあかんのやで。最近の若いもん
の歌とか言われたって出来るわけがないが
な。せやけど娘を見返すくらいの事カマさ
んとワシも立場ないでな」

佐伯「そうですけど…」

巖雄のスマホのメール着信音が鳴る。

巖雄「（スマホを見て）噂をすれば叶愛からや」

巖雄、メールを開き内容を読む。

巖雄「・・・」

佐伯「なんて来てるんですか？」

巖雄「あいつはただけワシを追い詰める気
なんや」

巖雄、スマホをテーブルに放り、立ち
上がって窓の外を眺める。

佐伯、巖雄のスマホを手に取りメール
の内容を見る。

『Hard to say I'm sorry』（シカゴ）

の動画のURLが貼り付けてある。

佐伯「『この曲でお願いします』？」

巖雄「曲考える手間、省けたな」

佐伯「これ、やるいう事ですか？」

巖雄「それ、難しいんか？」

佐伯「いやあ、バンド仲間はやったりしてま
したけど…。経験者ならなんとか…。でも

歌、英語ですよ」

巖雄「それは、つまり」

佐伯「・・・」

巖雄「ワシ以外のメンバーは出来るいうことやな」

佐伯「はあ：、まあ：練習したら多分：」

巖雄「ワシがその外人の歌をギター弾きながら歌えるようになりやあ、なんとかなるいう事やな？」

佐伯「親分：、これ他の曲にして貰うようにお嬢さんに頼んだ方が：」

巖雄、佐伯の目の前のテーブルをバンツと踏みつけて佐伯を睨みつけ、

巖雄「このワシがそんな事する思とんのか？」

佐伯「いえ、すみません」

巖雄「売られた喧嘩は買う。上等じゃあ。やったろうやないかい！娘に一泡吹かせたるわ！」

○巖雄の別荘リビング 日替わり（夜）

啖呵を切った巖雄とは別人の様に背中を丸めて一生懸命ギターのコード弾きの練習をたどたどしくしている巖雄。手取り足取り教えている佐伯。

巖雄 「えつと、：デー（D）いうたら：」

佐伯 「あ、Dのコードはこの指がこっちです」

巖雄 「あー、ややこしいな」

佐伯 「でも曲の三分の二程まで来ましたよ」

巖雄 「ほうか！？」

佐伯 「はい！（やりましたねと嬉しそうに）」

巖雄 「・・・」

佐伯 「・・・？」

巖雄、突然ギターを放り投げ、

巖雄 「一ヶ月もやってまだ最後までいのかんのか！」

佐伯、慌ててギターを拾い壊れてないか確かめる。

巖雄 「どんだけやったらええんや！指が、もう指が：、痛い」

佐伯 「親分、ちよつと休憩しましよ」

巖雄「あかん！この鬼熊巖雄、こんなところで
ケツ割るわけにはいかん」

佐伯「いや、ちよつとくらいはええでしょ」

巖雄「はよ続きやってくれ。次はどないして
弾くんや」

巖雄、佐伯が拾ったギターを奪い取る。

佐伯「親分：（ちよつとジンとして）」

巖雄「賢二。来週からバンドメンバー集めえ」

佐伯「え？」

巖雄「こうなったら、腹くくってバンド練習
や！」

出入りの日を決めるかのような険しい
顔つきで。でも痛い指をフーフーする。

○繁華街 日替わり（日中）

店の開いていない繁華街を憂鬱そうに
一人で歩いている佐伯。

ラウンジのママが通りがかり佐伯に話
しかけてくる。

ママ「あ！賢ちゃん。ちよつと最近親分どう

したん？」

佐伯「何が？」

ママ「開店前の店貸してくれ言うて、最近毎日のようにカラオケ歌いに来てはるけど、カラオケ大会でも出はるん？」

佐伯「え……？」

ママ「ズー……つとおんなじ歌、歌（うと）てはるわ。英語の歌。なんやったけ、なんとかアイムソーリー言うやつ」

佐伯「ほんまに！？」

少し驚き、表情が緩む佐伯。

ママ「えらい熱心におんなじ歌ばーっかり歌（うと）てはるから、『親分、なんか練習ですか？』て聞いてみたんやけどぜんぜん教えてくれへんし」

佐伯「あー、もうしばらくの間だけや思うから、悪いけどつきおうたってか」

ママ「いや、別にウチはええんよ。せやけど何なんやろうて気になってな」

佐伯「ママ、この件にはあんまり首突っ込ま

ん方がええ」

ママ「え？なんやのん？」

佐伯「ママの事信頼しとるから親分はママの
ところ行ったんや」

ママ「それは嬉しい事やけど……」

佐伯「まあ、親分も人の親やいう事や」

佐伯「そうかそうか」と少し嬉しそう
に去って行く。

腑に落ちないママ。

○鬼熊組事務所 昼間

事務所で待機している組員Aが信夫に
尋ねる。

組員A「親分、最近あんまり見かけんっすけ

ど事務所に居てはらへんのですか？」

信夫「親分は山で修行中や」

組員A「……え？」

○巖雄の別荘 外 日替わり（日中）

山奥にポツンと一軒だけある別荘。

車が二台到着する。

一台は佐伯のフルスモークの黒いセダン。一台は信夫の4WDのワイルドな車。

セダンから佐伯が降り、それに続いて桐山が降りてくる。

桐山「いい所ですね」

4WD車から咲也が降りてくる。

咲也「なんやこれ、ごっつい山奥やんけ」

ギターを担いだ佐伯、ベースを担いだ信夫について桐山、咲也も建物の中へ入っていく。

○巖雄の別荘リビング 同時刻

広々としたリビングに、ドラムセット、ギターアンプ、ベースアンプ、電子ピアノなどがセットされている。

咲也「おお！ちゃんとスタジオみたいやん！
パールのセットか！」

咲也、ドラムセットに座り叩いてみる。

桐山 「素敵なスタジオですね」

そこに部屋着の巖雄が入ってくる。

巖雄 「おお、みんな揃たか」

信夫 「ご苦労さんです」

咲也 「お！親分登場か」

信夫、咲也の頭をペシッと叩き、

信夫 「弟の咲也です」

巖雄 「信夫の弟か。ぜんぜん似てへんな」

桐山 「親分、ご無沙汰してます」

巖雄 「おう、桐山久しぶりやな。元気しとつ

たんか」

桐山 「はい、お陰様で」

巖雄 「これで役者は揃たな。あとは本番までのむで。ほなちよつとやってみよか」

× × ×

桐山、電子ピアノでイントロを弾き始める。

巖雄、コードとカタカナで書いてある歌詞を見ながら歌い始める。その独特な歌いまわしと、リズムに合っていない

いギターにメンバーの表情が固まる。
（演奏は巖雄の歌が入ったところまで）

× × ×

練習が終わり皆片付けをしている。

佐伯は気まずそう、咲也は半笑い、桐

山は極力にごやかに、信夫は無表情。

なんとも微妙な空気感。

巖雄 「ほな皆、来週もまた頼むで」

信夫 「はい！」

巖雄 「桐山」

桐山 「はい」

巖雄 「お前のピアノ、優しいええ音やなあ」

桐山 「ほんまですか」

巖雄 「前とは違うわ。顔も穏やかやしな。え

え女と出会（でお）たんやな」

桐山 「はあ、まあ：（照笑）」

巖雄 「大事にしたれよ」

桐山 「：はい（噛み締めるように）」

○巖雄の別荘外 同日（夕方）

玄関から出てくる巖雄以外のメンバー。

信夫「おつかれさんっした！」

桐山「お疲れ様でした」

咲也「これほんまあのおっさんがボーカルやるんか？あの歌でええんか？ギターもおかしすぎるやろ」

信夫、咲也の頭を叩く。

咲也「痛っ！」

信夫「親分も一生懸命練習してはるんや。それとおっさん言うな。親分や」

桐山「なかなか味のある個性的な歌ですね」

佐伯「バンドは大丈夫そうやけどな。親分はもう少し頑張ってもらわんとなあ」

佐伯、困り顔で車に乗り込む。

○巖雄別荘 中 同時刻

窓から夕焼け空を見上げ、煙草を吸いながら考え込んでいる巖雄。

小さく、歌の一部を口ずさんでみる。

巖雄『ほーーみなう。いつはふおみとうせい

：あいむそーりい：』：つてか：

巖雄、棚の写真立てを手にする。

若い頃の巖雄と亡き妻麻美、そして幼い叶愛の笑顔の写真。

巖雄「なかなか素直にはなれんわあ。なあ麻美：

巖雄、写真の麻美の笑顔を見つめセンチメンタルな雰囲気。

○叶愛のアパート（夜）

叶愛の亡き母、麻美の笑顔。

それは叶愛の部屋のアパートに飾ってある麻美だけ写っている写真。

叶愛が夕食を作って運んでくる。

叶愛「はい、お待ちどうさま」

田中「うおー、美味しそうやな。てか、かなちゃん、つわり治まったん？」

叶愛「4ヶ月目入ったらなんやケロっと治まったわ。さあ食べて！」

田中「そか！ほな、いただきます！」

田中、一口食べて、

田中「うんまあ！」

叶愛「これ昔お母さんに教えてもらたん。お
ふくろの味いうやつ」

田中「お母さんも料理上手やったんやな」

叶愛「あ、ところで、ほんまに大丈夫なん？」

田中「ん？何が？」

叶愛「治さんのご両親は理解してくれはった
言うけど、他の親戚の人にうちが極道の娘
やてバレへん？」

田中「大丈夫やろ、みんな田舎もんやからわ
からんて」

叶愛「ほんまにいい？せやけど、あの人が変な
事せんか心配やわ。何かへマしたら今度こ
そ絶対縁切ったる」

田中「あの人て…お父さんの事？かなちゃん、
なんでそんなお父さんと仲悪いん？」

叶愛「え…」

田中「言いたないかもしれんけど、お父さん
とも家族になるんやし、何があったんか僕

も知っておきたいんや」

叶愛、少し考えて、

叶愛「あの人のせいで母は苦勞ばかりさせられて病気になって死んでもたんや。母は極道の世界なんか似合わん、大人しいて優しい人やった。それやのになんであんな人と一緒になったんやろか。母が危篤状態になった時も、あの人、組の事で手が離せんとか言うてぜんぜん病院来んかったしな」

叶愛、何度もおかずを口へ運び、悔しそうに咀嚼する。

田中「そういう事があったんやなあ」

叶愛「ほんまは結婚式にも呼びたないくらいやけど、治さんのご家族の手前もあるしな。

あの人に最後のチャンスをやったんや」

そんな叶愛を優しく見つめる田中。

○ライブハウス 日替わり（夜）

店の入口には「今夜のライブ

『Spacelike infinity』の案内板。

店内のステージで高志、西口、戸田がスタンダードジャズを演奏している。半分ほどの席が埋まっている客席。ステージの高志は無表情で淡々とピアノを叩いている。

曲が終わり拍手が起こる。

西口「ありがとうございます。ではちよつと休憩頂きます」

三人ステージを降りる。

西口「島野」

真剣な顔で声のトーンも低めの西口。

高志「はい」

西口「いつもは練習やから仕方ないかな思ってたけど今日久々のライブやで？本番やで？お客さん聴いてくれとんやで？せやのに何でそんな弾き方するん？」

高志「え：何かオレ間違えました？」

西口「ちやうねん。島野は一人で弾いてるみたいやねん。前にも言うたけど俺らおらんみたいに弾いとる。部室の時はアップライ

トピアノやから壁向いてるし仕方ないかもしれないけど、今日はステージで3人向かい合ってる状態やのに島野はこっち見もせん。気持ちもぜんぜんこっち向いてない。俺らほったらかしやん。俺と戸田の事、嫌なん？」

穏やかな西口が珍しく語気を強めて話している。

高志「別にそんなことないですけど……」

西口「もうちょっと寄り添って欲しいな。やっててテンション下がってまう」

高志「え……ちゃんとみんなと合わせて弾いてますけど……？」

西口「そうじゃなくて」

高志「……」

友人A「西口——！」

離れた席から西口を呼ぶ友人A。

西口、そっちを見て、

西口「あ、ちよっと待って！」

高志に向き直り、

西口「バンドってな、みんなで音楽作ってるやで。他のメンバーがどんな事したいと思ってるか聴きながら演奏するもんや。自分のピアノだけやなくて俺らにも興味持ってくれよ」

西口、友人たちの席へ向かう。

不機嫌になり考え込む高志。

○道 日替わり（夜）

桐山と同棲中の恋人、塚井美晴（28）が二人仲良さそうに歩いている。

9月に入り虫の声が響く穏やかな夜。

桐山「今日は俺が夕食作るわ」

美晴「えー？ほんまに？急にどうしたん？」

桐山「いや、美晴にはいつもお世話になってるから……。大したもんは作れんけどな」

美晴「え、嬉しい！何でも嬉しいよ！翔ちゃんを作ってくれるっていうその気持ち嬉しい！」

嬉しそうに桐山の腕にしがみつく美晴。

二人の後ろをこっそりつける黒い人影。

桐山「俺、今日運送会社の仕事決まった」

美晴「そうなん？昼も夜も働くの？」

桐山「いや、夜の仕事は辞める」

美晴「ピアノやめてしまうん？」

桐山「別にピアノはいつでも弾ける。仕事としてやっていけんでもええねん。それより今の生活を守っていくことを一番に考えたいと思うようになったんや」

美晴「翔ちゃん……」

桐山「美晴。いつもありがとうな。色々苦労もかけたけど、俺ほんま、美晴の事大事に思ってる」

美晴「え：改まってどうしたん」

桐山立ち止まり、美晴の方を向く。

桐山「俺な、真剣に考えたんや。真剣に考えて、それで：こんな俺やけど美晴と：」

葉子「ハルト！」

突然黒い人影が叫ぶ。

驚き振り向く桐山。

近寄ってきた黒尽くめの服装の土井葉子（36）。手には包丁を握っていて、ひと目で常軌を逸しているのがわかる。

桐山「（青ざめて）葉子！？」

美晴「え？」

葉子「ハルト？なに若い女とイチャイチャしとん？」

美晴「なに言うてるんですか？この人ハルトいう名前と違いますよ！」

葉子「はあ？ハルトやん。なあ？ハルト」

桐山、美晴を庇うように後ろにやり、

桐山「葉子。落ち着いてくれ。落ち着いて話そ」

葉子「何が落ち着けや。私があれからどんな辛い思いして暮らしてきたかも知らんと、何自分だけ幸せそうにのほほんと暮らしとんねん」

桐山「その事はもう終わらせたやんか」

葉子「私はまだ終わってへんねん！あんだだけ幸せになるとか許さんへん！あんだ殺

して私も死ぬ！」

桐山「ちよ、待て！」

にじみ寄る葉子から美晴を庇うように
背を向けた桐山の背中に包丁を突き刺
す葉子。

うめき声を上げて倒れる桐山。

美晴「きゃあー！ー！」

○巖雄の別荘 日替わり（日中）

ギターを練習している巖雄。

佐伯が急いで入ってきて、

佐伯「桐山が刺されよりました」

巖雄「何？誰にや？」

佐伯「昔の女です」

巖雄「ucci、言わんことない」

佐伯「命は取り留めたみたいですが、しばらく

く入院らしいです」

巖雄「とうとうバチがあたりよったか」

佐伯「・・・」

巖雄「まあ、命助かったんやったらええ。え

えけど、バンドのキーボードはどないなるんや」

佐伯「はあ：、無理でしょね」

巖雄「無理言うて、もう後半月程やぞ」

佐伯「もうこうなったらキーボードだけはど

つか音楽事務所に頼みましょう」

巖雄「あかんっ」

佐伯「あかんて言われても：」

巖雄「あかんもんはあかん。いっぺんこの鬼

熊巖雄が言うた事は何が何でもひつくり

かえす事はあかん。賢二、そんな事くらい

わかつとるやろ？」

佐伯「：はい：」

巖雄「まだ時間はある。なんとかせえ」

佐伯「：はい（ため息）」

○高志の部屋 日替わり（夕方）

ベッドで寝転んで考え込んでいる高志。

× × ×（フラッシュ）

西口「自分のピアノだけやなくて俺らにも興

味持ってくれよ」

×

×

×

高志、ゴロンと寝返り、

高志「興味って何やねん」

スマホが鳴る。

高志「もしもし」

○弁当屋の裏口前 同時刻

パート先の弁当屋のエプロン姿で電話
をしているまり。

まり「あ、高志、今どこおるん？」

（以下、高志の部屋と弁当屋、適宜カットバ
ックで）

高志「家おるけど」

まり「ごめんやけど空の保育園にお迎え行っ
てくれへん？お母さん、急に休みになった
パートさんの代わりにもうちよつと店お
らなあかんようになっててもてん」

高志「ええ？（面倒くさそうに）」

まり「頼むわ。今こっち、この時間に手が足

りんで、てんやんわんやなつとるから。
な！ごめんやけど頼んだで！」

高志、面倒くさそうに起き上がる。

○道 同時刻

困り顔で車を運転している佐伯。

カーステレオから『五番街のマリーへ』
が流れている。

『マリーという娘と遠い昔に暮らし
悲しい思いをさせた　それだけが気が
かり：』

弁当屋の前を通りがかり、裏口から店
内に入っていく弁当屋の店員（まり）
に目が留まる。

佐伯「まり：」

○弁当屋 同時刻

店内には3人の客が注文した弁当を待
っている。

様子を伺いながら店内に入っていく佐伯。

厨房の方から「いらつしやいませ」

と声がする。

まり、カウンター越しに出てきて、

まり「76番でお待ちのお客様！」

客が弁当を取りに行く。

まり「おまたせしました！唐揚げ弁当とデラ

ックス弁当ですね。ありがとうございます

た！」

ゆっくりカウンターに近づく佐伯。

まり「いらつしやいませ！ご注文お伺いしま

しよか。あれ：？賢ちゃん？」

驚きながらも嬉しそうに笑うまり。

佐伯「久しぶりやな」

まり「ほんま久しぶりやん！何年ぶり？」

店の奥から「コロッケあがりました！」

と声がする。

まり「賢ちゃんちよっと待ってな」

忙しそうに厨房に入っていくまり。

すぐ出てきて、

まり「77番でお待ちのお客様！コロッケ

弁当お一つですぬ！」

気を遣い店内のメニューを見る佐伯。

まり「ありがとうございましたあゝ！賢ちゃん、弁当なににする？」

佐伯「え？あゝ、えっと……」

空「ママー」

空が店内に走って入ってくる。

後から高志も面倒臭そうに入ってくる。

まり「あら、空ゝ！」

佐伯、二人の姿を凝視する。

まり「（佐伯に）娘と息子」

高志「（まりに）200円頂戴」

まり「え？今？」

高志「空がなかなか帰ろうとせえへんからジ

ュース買（こ）うたる言うて釣ってん。け

どオレ財布持ってへんから」

まり「そうなん？もう空あ。せやけど財布奥

やしちよっと待つとける？」

空「ジュース！ジュース！飲みたい！」

佐伯「あ、おっちゃんがジュース買うたろ」

まり「いや、ええよええよ。空ちよっただけ待っというて」

奥から「油淋鶏2つあがりました」と声がする。

まり「はあい」

急いで厨房へ向かうまり。

佐伯、空の前にしやがみ、

佐伯「ジュース何がええんや？」

空「ぶどうのシュワシュワ」

佐伯「ぶどうのシュワシュワかあ。ここにはないやつやな（店内の商品棚を見る）」

空「お外にあった！」

○弁当屋の外 同時刻

弁当屋の横の自動販売機でジュースを
買い空に渡す佐伯。

佐伯「アニキは何か飲むか？」

高志「俺はいいです」

佐伯「そうか」

高志、ジッと佐伯を見てからスマホに

目を移す。

空、横のベンチに座り、

空「にいに、開けて（高志にジュースを向け）」

佐伯「おっちゃん、開けたろ。（ブシュツと蓋を開けて）はい」

空「ありがとう」

炭酸に顔をしかめながらジュースを飲

む空。

佐伯「うまいか？」

空「うん」

嬉しそうな佐伯。

空「にいに、帰ったらピアノ弾いていい？」

佐伯「ピアノ？」

高志「ちよつとだけやったらええけど」

空「やったあ」

高志「ちよつとだけやで」

佐伯「あゝ」

まりが財布を持って店から出てきて、
まり「あー、賢ちゃんごめん。なんぼやった？」
佐伯「いや、そんなんええわ。それよりもし

かしてアニキはピアノ弾けるんか？」

まり「あ、高志？うん、小学生の頃から好きで弾いてるわ」

空「空も弾くで」

まり「せやなー、空も上手やなあ」

高志「空、もう帰んで」

高志、歩き出す。

まり「空、ママもう少ししたら帰れるから、にいと先に帰つていてな」

空「うん」

空、高志を追いかける。

その二人の後ろ姿を見送るまり。

途中で振り返る空に手を振る。

佐伯「幸せそうやな」

まり「うん」

佐伯「せやけど、兄妹えらい年離れとんな」

まり「あー、高志産んで私しばらくシングル

やったからね。せやから高志には音楽教室なんかよう通わしてやれへんかったのに知り合いにもろた電子ピアノずーっと一

人で弾いて、けっこう上手いんやで。最近
は大学のサークル入ってライブとかもし
てるみたい」

佐伯「ライブもしとるんか」

まり「賢ちゃんはあれから親愛園行った？」

佐伯「いや、行ってない。十八歳で追い出

されてからは結局一回も行っていないわ」

まり「そうなん？ 私は、時々園長先生が弁当
の注文してくれるから配達で行ったりし
てるで。賢ちゃんの事も気にしてたで」

佐伯「園長先生元気なんか？」

まり「元気元気（笑）」

佐伯「そうか」

遠くなった娘と息子の背中を見つめて
いるまり。

佐伯も二人の姿を見つめながら、

佐伯「（少し考えて）：まり、しばらくシング
ルやった言うとったけど、高志君で：」

まり「ん？」

佐伯「あ、俺ら一緒に暮らしとったんが二十

年前やろ、せやからもしかして：」

まり、少し表情を曇らせ、

まり「え？賢ちゃんの子かと思ってるん？」

佐伯「・・・」

まり、何か言いたげなのを飲み込み、

まり「：ちやうし」

佐伯「：ほんまか？」

まり「なんで今更そんな話：」

佐伯「まり：、今更やけど、オレで助けになれる事やったら何でも言うてくれよ」

まり「いや大丈夫やって。だいたい今私結婚してるし」

佐伯「ああ：せやな。空ちゃんの父親か」

まり「うん。そのお陰で高志も大学行かせて貰えて、感謝してるわ」

佐伯「ええ人に出会えたんやな」

まり「まあな：。で、賢ちゃんは？ええ人おらんのか？」

佐伯「俺は：、色々難しいわ」

まり「なんなん？（苦笑）それで今も極道や

ってんのん？」

佐伯「今の親分には若頭の時からよう世話になつとるから」

まり「今はあの若頭が親分なりはったん？」

元気してはるん？」

佐伯「元氣は元氣やけども……」

まり「どないしたん？」

佐伯「まり……高志君、貸してくれんか？」

○喫茶店 日替わり（日中）

お手拭きで丁寧に手を拭きテーブルに
たたみ直して置いたのは、高志。

それを見て、何か思いながら同じ様に
佐伯もお手拭きを丁寧にたたんでテ
ブルに置く。

佐伯「高志君。よう来てくれたな」

高志「はあ……」

佐伯「お母さんから用件は聞いてくれとる
か？」

高志「バンドでキーボード弾くバイトの事で

すか？」

佐伯「せや。1曲だけなんやけどな、十月三日の本番までだけ頼みたいんや。これ楽譜や」

佐伯の出した楽譜を手に取り目を通し、

高志「わかりました」

佐伯「頼まれてくれるか！？あー助かるわ。

いや、急にキーボードの奴が刺され：、いや、ささ：ササッとおらんようになってもたから。うん、あの、仕事でな。うん。高志君来てくれたら助かるわあ」

高志「・・・」

佐伯「うん、ほな、チョコレートパフェでも食べるか？」

高志「いえ：いいです」

佐伯「プリンアラモードもあるで」

高志「いや、：いいです」

○巖雄別荘 玄関 日替わり（日中）

玄関のドアを開けて入ってくる佐伯。

高志、恐る恐る後に続き入ってくる。

佐伯「上がって」

高志、他のメンバーが適当に脱いで置いてある靴の端っこで靴を脱ぎ、きちんと揃え直す。

その横に佐伯も同じ様にきちんと靴を脱ぎ、他のメンバーの靴も揃え直す。

○巖雄別荘リビング 同時刻

仏頂面でベースを抱える信夫。だらしなくドラムセットに座る咲也。強面でギターを抱える巖雄。

電子ピアノの前に居心地悪そうに座っている高志。

佐伯、エレキギターを持って心配そうに高志を見て、

佐伯「そう固う（かとう）ならんと」

巖雄「高志君、いうたな？」

高志「はい……」

巖雄「（につこりして）まあよろしゅう頼むで」

高志 「：はい」

巖雄 「ほなちょっとやってみよかあ」

佐伯 「高志君のピアノからや。頼むで」

高志、『Hard to say I'm sorry』のイントロを弾き始める。

歌い始める巖雄。前回よりは少し上達しているが、やはりつたない上に妙にクセのある独特な歌い方。

佐伯は親分の様子を気にしながら、咲也は顔をしかめてつまらなさそうに、信夫は無表情で坦々と演奏している。空気の悪さにとまどいながら電子ピアノノを弾く高志。

× × ×

曲が終わる。

巖雄 「高志君、なかなか上手いやないか」

高志 「：ありがとうございます：」

佐伯 「親分も、だいぶんうまになりましたね」

巖雄 「そうか？」

咲也 「・・・」

信夫「・・・」

巖雄「高志君。どうや？」

高志「え：」

巖雄「バンドとしてどうや？」

高志、何と答えていいかわからず目を泳がす。

高志「バンドと：して：」

× × ×（フラッシュ）

西口「バンドってな、みんなで音楽作ってるんやで」

× × ×

高志、ハツとする。

高志「：バンドなんで、もうちょっとみんなで音楽作っていった方がええかも：思います」

巖雄「ほう。それは具体的にどないしたらええんや」

× × ×（フラッシュ）

西口「もうちょっと寄り添って欲しいわ」

× × ×

高志「もう少し、お互いが寄り添う：？みた
いな：？」

巖雄「ほう、ほなもうちよつと皆近づいた方
がええんか」

巖雄、椅子をズルズル引きずり前に出
す。

高志「いや、あの、音の事です」

巖雄「音か」

高志「今、皆さん何を考えながら演奏してま
すか？」

巖雄「そら、うまい事この歌を歌いきって娘
をギャフンと言わせたるう！思て：」

咲也「これくらいの曲やったら何も深いこと
考えんでも出来るしな」

高志「他のバンドメンバーの事は考えてます
か？」

佐伯「俺は久しぶりの演奏やから、自分のや
ることで精一杯やわ」

咲也「みんなノリがいまいちやなあ思てやつ
とるわ（笑）」

信夫、咲也を睨む。

高志「バンドなんで、もうちょっと気持ちを合わせた方がいいと思います。気持ちがバラバラやったら音もバラバラになつてもええ音楽は作れません」

巖雄「ほお」

咲也「なんか偉そうな事言うてるけど、兄ちゃんは音楽のことそんなけ、よーわかたんのんか」

高志「…いえ…、俺はよーわかってません。

でも、俺の先輩が教えてくれたんです」

佐伯「高志君の言うとする事はわかる。確かに気持ちを一つにせな上手いこといかんと思う」

咲也「そんな、青春ドラマみたいな臭いセリフ、よう真顔で言えるな。音楽はノリやで。ノリ！みんなノリ悪いわ」

信夫、咲也を睨んでバスドラの縁を蹴飛ばす。

咲也「なんやねん」

信夫「・・・（咲也を睨む）」

巖雄「ふむ：高志君。それ：」

巖雄、ゆつくり立ち上がりギターを抱
えたまま高志に近づく。

その威圧感に引いてしまう高志。

巖雄、ジャラーンとギターを鳴らして、

巖雄「詳しい教えてくれ」

高志「あ：、えつと：、とりあえず、まわり
の音聴いて、みんなと楽しみながら弾く
：？みたいな：（オドオドしながら）」

巖雄「ふむ：」

咲也「だっさ。幼稚園のお遊戯か（鼻で笑う）」

信夫、咲也の頭をはたく。

巖雄「ワシにはまだそんな余裕がないなあ」

佐伯「親分はギター経験ゼロからこの二ヶ月
程でここまで弾けるようになったんや」

高志「そうなんですか？それはすごいと思っ
ます」

巖雄「そうか！そう思うか！」

高志「もうちよつと練習は必要やと思います

が：、あとはみんなと楽しむだけです」

巖雄「わかった。ワシがもっと練習して楽しめるだけの余裕を作らなあかんいうことやな」

咲也「あとノリやな！」

信夫「ノリノリノリノリ、ノリの事ばかりうるさいんじゃ！お前はおにぎりか！」

高志、いきなりの信夫のツツコミに目を丸めながらも、

高志「あ、でもこの曲はバラードですけど、確かにノリも大事ですね」

咲也「せやで。バラードにはバラードのノリがあるやろ」

巖雄「ほなとりあえずもう一回ちよつとやってみてくれるか」

高志「はい」

高志、イントロを弾き始める。

さつきより、メンバーの様子を見ながら弾いてみている。

○佐伯の車内 同日（夜）

佐伯、助手席に高志を乗せ家に送り届ける道中。高志の手に缶のミルクティ。カーステレオから懐メロが流れている。佐伯はサングラスをかけドライブ気分。時々懐メロを口ずさんでいる。

佐伯「簡単そうで難しいよな」

高志「え？」

佐伯「音をあわせる言うけど、今まではあんまりそんな事考えんとやっとなかったから、どないしたら合わせられてるんか、いまいち正解がわかりにくいな」

高志「んー：」

佐伯「俺の若い頃は自分が気持ち良かったらそれでええ思てやってたからな。他のメンバーの気持ちなんか考えた事もなかったわ」

高志「・・・」

× × ×（フラッシュ）

西口「気持ちもぜんぜんこっち向いてない。」

俺らほったらかしやん」

×

×

×

高志「俺もです。考えた事もなかった」

佐伯「そうなん？」

高志「多分：、恵まれてたから気付んかったんやと思います。まわりが俺に合わせてくれてたから」

佐伯「なるほど。で、今日、みんなが合わせへん環境に置かれてそれに気づいた、いうわけやな」

高志「あ：、いや：まあ：」

佐伯「みんな急な寄せ集めやしな、心一つに！言われてもピンとは来んかもな（笑）」

高志「俺、人見知り激しいんで、ほんまはそういうのん苦手なんですけど：」

佐伯「そうなんや？あーそういや俺も若い頃はどっちか言うたらそういうタイプやっとなあ。友達おらんかったわ（笑）」

高志「俺も友達いないです」

高志、少し嬉しそうに言う。

佐伯「変にこだわり強かったし。みかんの白い皮は全部キレイに取ってから食べるとか」

高志「あ、わかります！」

佐伯「あれツルツルになるまでやらんと食べれんよな！」

高志「はい。で、母親にはよ食べる言われても絶対最後まで剥いてた」

佐伯「わかるわー！最後までやり遂げな気が済まんやつかいなタイプ！（笑）あと、部屋を散らかしたないから徹底的に物を置かへんとか」

高志「（高志身を乗り出し）俺もです！部屋をキレイに保つには物が無いに限るんで」

佐伯「そうそう！なんか俺ら似てるんちゃう？」

高志「そうですね」

高志嬉しそうに打ち解け始める。

そんな高志を見て、ハツとする佐伯。

佐伯「なあ…、高志君の…、実のお父さんて

どんな人？」

高志「え？…ぜんぜん知りません。産まれた時からおらんし写真もないし」

佐伯「お母さんから何か聞いたたりせんのか？」

高志「母親は、あんたはお母さんの子や、としか言わんので」

佐伯「そうか…」

高志「あ…、そう言えはいっただけチラつきいた事あります。子供の頃、俺が靴を揃え直しよったら『お父さんの血やな』…て」

思わず急ブレーキを踏んでしまう佐伯。

佐伯「マジか！？」

もしや自分が高志の父親なのではないかと思ひ動揺を隠せなくなる佐伯。

高志「なんか…今、思ひ出しました…」

佐伯「え…、え、もしかして…、やっぱり…」

高志君で…」

高志「（動揺する佐伯を見て）・・・」

佐伯「いや…、なんでもない…」

佐伯、氣を取り直し再び車を走らせる。

佐伯「靴は：、揃えといった方が見た目もええし、履く時履きやすいからな」

高志「：ですね」

急にテンポが悪くなった会話の間を埋めるように話し出す佐伯。

佐伯「あー、お母さんと長い事二人っきりで暮らしとったんやって？」

高志「高校入るまでです」

佐伯「高校入った時にお母さん再婚したん？」

高志「なんか、高校受験終わるまでは俺が精神的に不安定になるとあかんから言うて、それまではつきあってる事も隠されてました」

佐伯「まりの考えそうな事やな」

高志「母の事良く知ってるんですか？」

佐伯「あ：、お母さんはなんて言うてた？」

高志「一緒に施設の施設で育った幼馴染やて」

佐伯「せや。幼馴染や。物心ついた頃から一緒にあったわ。懐かしいなあ」

佐伯、動揺を隠すように缶コーヒーを

飲む。

高志「佐伯さんは昔母とつきおうてたんですか？」

佐伯、ゲホッと咽る。

佐伯「え？！なんで？」

高志「いや、そんな仲良かったんやったら、つきおうてたのかな思ただけです」

佐伯「お母さんは何か言うてたん？」

高志「なんも言うてませんけど」

佐伯「まあー…、仲良しや（動揺）」

高志「そうですか…」

高志、ミルクティを飲む。

佐伯「今のお父さんは、ええお父さんか？」

高志「別によろ知りません。お父さんとは思
てませんし。あの二人が勝手に決めた事な
んで」

佐伯「…家族とうまい事いつてないん？」

高志「・・・」

佐伯「…まあ、色々複雑な気持ちもわからん
ではないけどな」

高志、ミルクテイの缶をギュツと握る。

○高志のアパート　6年前（夕方）（高志回想）

学生服姿の中学生の高志（13）が帰ってくる。

リビングで洗濯物をたたみながらうたた寝しているまり（35）。髪型も乱れ、やつれている。

高志「ただいま」

まり、はっと気がついて。

まり「あ、高志おかえり！ いやや、ウトウトしてもてた。晩ごはん生姜焼きしといたからチンして食べな。高志好きやろ？」

慌てて、たたんだ洗濯物を抱え、立ち上がったところを貧血で倒れ込むまり。

高志「大丈夫？」

あわてて駆け寄る高志。

まり「あー、ごめんごめん、大丈夫。うたた寝しとったからフラついてたわ」

まり、すぐに立ち上がり洗濯物を運ぶ。

高志「俺がやるから、ちよつと横になつとき」

高志、まりを支え洗濯物をつかむ。

まり「大丈夫大丈夫。もう夜のパートに行く時間やから」

高志「パート先で倒れてまうで」

まり「大丈夫やて！お母さんこう見えてタフなんやから！」

高志「いや、今倒れとつたやん」

まり「あはは！ボケーっとしてもとつたわ。どんくさいな」

高志、洗濯物を奪い取り、

高志「お母さん無理ばかりして」

まり「そんな事ないよ。高志がおってくれるからどんどんお母さん力湧いてくるねん」

高志「…俺、はよ働きたい」

まり「なんでよ？あんたは賢いんやから何も気にせんと学生らしいに勉強して青春しといたええねん。お母さんは何が何でもあんたを大学に行かせるからな。あんたには選択肢のある人生を歩んで自分の幸せ

を見つけて欲しいんや」

高志「今でも十分幸せやし」

まり「あんたはほんま優しいええ子やな。でもな人生はこれからや。まだまだ辛いことや悲しいことがなんぼでも降って湧いてくる。そんな時に選択肢があった方が強く生きれるんよ。お母さんはそれが無かって悔しい思いいっぱいしてきたからあんたには同じ思いして欲しないねん」

高志「ほな俺、高校生になったらバイトしてお母さんが楽になるように頑張るから」

まり「高志……」

高志「俺がお母さん支えられるように頑張るから」

まり「ありがとう（涙目）」

まり、自分より背の高い高志の頭を愛おしそうに撫でて抱き寄せる。

幸せそうな高志の顔。

○高志のアパート　4年前　春　（日中）

まり（37）、トイレで吐いている。

高志「お母さん、大丈夫？何か悪いもん食べたん？」

中学を卒業してこの春高校生になる高

志（15）が介抱している。

まり「ごめん…、大丈夫」

ピンポンとインターホンが鳴る。

まり「あ、出るわ」

フラフラしながら玄関を開けるまり。

入ってくるスーツ姿の義輝（40）

高志、顔が強張る。

まり「こないだちよつと話してた、島野さん」

義輝「こんにちは。高志くん？はじめまして。

島野です」

口元を押さえ俯くまりを支える義輝。

義輝「つわり、ひどいん？」

まり「あ…、いや…」

高志を気にするまり。

呆然と立ち尽くす高志。（回想終わり）

○ライブハウス 日替わり（夜）

高志、西口、戸田のトリオでライブをしている。1ステージ目の最後の曲が終わったところ。

高志、曲の締めにちらりと西口を見る。

音の終止の目配せをする西口。

西口「（マイクで）はい、ありがとうございますしました。とりあえず一旦休憩頂いて、セカンドステージもありますんで帰らず待っててくださいねー」

拍手を受けながら西口、戸田は友人達のところへ行き盛り上がっている。

高志はカウンターへ行き一人座っている。そこに千林がやって来て、

千林「お疲れ。良かったよ！」

高志「ありがとう」

千林「テンション低っ。まあいつもの事やけど。景気づけにビールでも飲んだら？」

高志「あかんやろ、まだ未成年やし」

千林「わかってるわ、真面目か！（笑）」

店内では西口と戸田を囲んで賑やかに
乾杯して盛り上がっている。

千林「先輩方盛り上がってんなあ。島野君の
友達は来てへんのん？」

高志「俺、友達おらんから」

千林「あらあ、それはライブの集客厳しいな。

まあ私がおるから約一名様は確保出来る
けどな。すいません！ビールください！」

高志「え？もう二十歳なったん？」

千林「えー！もう忘れてるー！先月に二十歳
になりましたけど！サークル帰りにジュ
ース奢ってくれたやん！」

高志「そうやったけ」

千林「ええー！？マジか！」

ビールを受け取り一口飲む千林。

高志「次歌うん？」

千林「うん、1曲飛び入りさせて貰う。何歌
おっかなあ。まだ3曲の内どれにしようか迷
てるねん。島野君はどれがいいと思う？」

千林、バッグの中の譜面を探る。

西口「島野」

話に割って入ってきた西口。

西口「あ、ごめん割って入ってもて」

千林「いえ、大丈夫ですよ」

西口「あ、なあ桃ちゃん、今日の島野の演奏、

今までとちよつと変わってきてたよな」

千林「うん、なんかね、今日は西口さんがち

よつと嬉しそうにしてるなあと思った！」

西口「え、俺顔に出てた？」

千林「出てましたよ」

西口「演奏中に何回か島野と目がおうたねん」

高志「なんすかそれ」

西口「そういう事なんやて。でも後もうちよ

つと心開いてほしいなあ」

千林「うんうん。島野君、もっと自分を開放

せな」

高志「開放て……」

西口「もつとオープンにやな、恥ずかしがら
んと素直に自分の気持ちを鍵盤に乗せる
んや」

高志「なんなんですか、それ」

千林「そうや！島野開放や！オープンマインドやでえ」

× × ×

セカンドステージでスタンダード曲を演奏をしている高志、西口、戸田。

西口の事が気になり演奏に集中できない高志。高志と目が合うと嬉しそうに笑い演奏に更に力が入る西口。
曲が終わり拍手が起こる。

高志「(ボソッと) くないせえ言うんや」

西口「では、ここで飛び入りゲストをお迎えしたいと思います！うちのサークルの歌姫、千林桃ちゃんです」

千林、ステージに上がりバンドメンバーに「お願いしまーす」と譜面を配る。

千林「(マイクで) こんばんはー。只今ご紹介にあずかりました千林桃と申します」

歓声と拍手が起こる。

千林「ありがとうございます。では先輩方

の胸をお借りして1曲歌わせて頂きたい
と思います」

西口「あ、その前にちよつと。今桃ちゃんからメンバーに手渡されましたこの1枚の譜面。これを見て我々はぶっつけ本番で演奏をするわけですが、さて、どんな演奏になるか、それは我々も桃ちゃんもまだわかりません。今、この瞬間だけのオンリーワンの演奏となります。それがジャズです」
戸田がドンドンドンとドラムを鳴らして盛り上げる。

西口「我々は桃ちゃんを想い、桃ちゃんに捧げる音を奏で、それを皆様に届けるように演奏します」

誰かが客席で「ヒュー」と声を上げる。

千林「わあ嬉しい！では私も心を込めてバラードを一曲お送りします。『The nearness of you』あなたのそばに」

そう言って千林、高志を見る。

高志、千林と目が合い一瞬戸惑うが、

体を揺らしながらカウントを出し高志を見つめる千林の姿に引き込まれるようにイントロを弾き始める。それを見る西口。

美しいイントロ。幸せそうに歌い始める千林。聴き入る観客。

高志、演奏しながら感情豊かに歌い上げる千林の美しいその姿に心打たれ、その感情をピアノの音色に乗せていく。驚きながらも納得したように笑顔で演奏している西口。戸田も楽しそう。

× × ×

ライブが終わりステージ上で譜面を揃えている高志。

西口「ええやん。島野の気持ち、感じ取れたで。なんか痺れたわ」

高志「え？」

西口「桃ちゃん様々やな」

ニヤニヤしながら去る西口。

高志「・・・」

お客さんに声をかけられ楽しそうに話している千林の姿を見つめる高志。

○商店街 日替わり（日中）

買い物をしているラウンジのママ。

通りがかった佐伯を見つけ駆け寄る。

ママ「ちよつと、ちよつと賢ちゃん！」

佐伯「おう、ママ」

ママ「親分、今度はギター持ってきて歌ってはるで。弾き語り？組のかくし芸大会でもあるのん？」

佐伯「ママ、この事は極秘事項やから。誰にも言うたらあかんで」

ママ「いや、言うてないよ！親分も完璧に変装して来てはるわ。ほんま極秘なんやね」

佐伯「せや。この事が誰かに漏れたらどエライことになるからな。たのむで」

ママ「ふん、わかった。お口チャックやな」

真剣な顔でお口チャックするママ。

嬉しそうに立ち去る佐伯。

○巖雄の別荘　日替わり（日中）

バンド練習に集まっている鬼熊バンド
メンバー。

巖雄「練習も残すところ後わずかや。本番まで一週間もない。皆よろしゅう頼むで」

佐伯「はい」、信夫「へい！」、咲也「はいよ」、高志「はい」とそれぞれ同時に返事する。

高志「あ、練習前にちよつといいですか」

巖雄「お！高志君なんや！」

高志「俺、最近やつと気づいた事があって」

巖雄「ふむ」

高志「あの、バンド演奏するのに気持ちを寄せるっていうのは、つまり一緒に演奏してる人に心許すっていう事なんちゃうかな…と思たんです」

巖雄「ほう？」

高志「なんていうか、その人の事好きになるっていうか…」

× × ×（フラッシュ）

西口のライブでの嬉しそうな笑顔。

千林が幸せそうに歌う姿。

× × ×

咲也「え？そんな男同士でキモいやろ」

高志「男も女も関係ないです。人としてその人の事好きと思って、その人にちゃんと興味持って、その人の音をよう聞いてたら、俺は音が変わった言われました」

巖雄「ここのメンバー同士も好きになったらええ音出せるいう事か？」

高志「それは…、やってみんと…」

巖雄「やってみんと、わからんっちゅう事か」

巖雄、ギターを置いて立ち上がり、目をギラギラさせて高志に近づく。

高志、巖雄の目力に思わず身構える。

電子ピアノの前に立つ巖雄、

巖雄「ちよっとこっち来てみい」

高志、恐る恐る巖雄の側に行く。

突然巖雄が高志を抱きしめる。

高志「うつ」

あまりの力にうめき声を上げる高志。

巖雄「こういう事か」

高志「あゝ、いやゝ」

巖雄、高志から離れると、佐伯に向かっていく。

一瞬佐伯も後ずさるが巖雄に捕獲され抱きしめられる。

黙ってされるがままの佐伯。

巖雄、佐伯を抱きしめたまま咲也に、

巖雄「おい、お前らもやらんか」

咲也「なんでやねん。そんな事誰がするか！」

と言っている咲也を信夫が無理やり引っ張り抱きしめる。

咲也「おいっ、やめろや。キモいねん！」

咲也、抵抗してもがくが信夫の力には及ばない。

信夫「咲也、ちよつと黙ってみ」

咲也「・・・」

兄の何かを感じ取る咲也。

巖雄、佐伯から離れて、

巖雄「佐伯と高志でやってみい」

高志「え：」

気の進まない高志。

佐伯もためらっている。

そんな二人を巖雄が力付くでくつつける。

恐る恐る高志を抱きしめる佐伯。

息子かもしれないと思っている高志に
対して言い難い愛情が胸にこみ上げる。

巖雄「うんうん」

何やら一人納得している巖雄。

信夫、咲也から離れ両手を広げ巖雄に
抱きつく。それを受け止める巖雄。

信夫「俺は、親父のぬくもりを知らんです。

咲也は、父親にも母親にも抱きしめられた
事がない。俺も咲也の事抱きしめてやった
事なかったです」

巖雄「そうやったんか」

巖雄、咲也の元へ行く。

咲也「いや、もう俺はええて」

後ずさるが、巖雄の眼力に負け抱きしめられる。

巖雄「お前も色々苦勞してきたんやなあ。なんや口が悪いんもその苦勞が災いしとんのやな」

咲也「・・・」

うつかり涙目になる咲也。

巖雄「よし、後は抱きおうてない奴は抱きおうてくれ」

信夫は、佐伯、高志を順番に力いっぱい抱き締める。

咲也「俺は：もう十分や」

と鼻をすすったのを見て佐伯と高志は顔を見合わせ咲也の両側から抱きつく。

咲也「だからもうええて！」

佐伯と高志、笑っている。

場が和やかな雰囲気になってくる。

巖雄「これで皆愛情を確認しおうたな。ほな、ちよつとやってみよか」

佐伯「(こっそり高志に)ほんまにこれでええんか？」

高志「ちよつと思てるのと違いますけど、ええんちやいますか」

(音はBGMで実際の演奏は聞こえない)
イントロを弾き始める高志。さっきの名残で表情が綻んでいる。

歌い始める巖雄の歌も個人練習の成果が出て上達していて、咲也が少し驚いた表情を見せる。

それぞれに表情が緩み演奏に感情が乗っている。信夫は相変わらず直立で弾いている。

× × ×

演奏が終わる。

巖雄「高志君、どうやった」

高志「なんか、楽しかったです。みんなと一緒に音楽やってるって感じました」

巖雄「そうか！」

高志「あゝ、でも信夫さんは、まだ表情が固

いような：」

佐伯、高志の肩を叩き信夫に目線をやる。

佐伯「信夫も十分感動しとる」

よく見ると信夫の目にうつすら涙が浮かんでいる。

高志「あ：」

信夫「音楽って、ええなあ：」

巖雄もうんうんと納得している。

咲也「何わけわからん事言うтонねん！ あほか！」

トゲの無くなった言い方の咲也。

信夫「だーっとけ！しばくぞ！」

愛情たっぷりの信夫の返しに皆が笑う。

笑顔で打ち解けていく高志、佐伯に提案する。

高志「あの、佐伯さん、原曲でストリングスやホーンがいつてるとこ、エレキで弾いたらかっこええと思うんですけど」

佐伯「あー、なんか入つとるな。どこらへん

やったかな？」

高志「譜面のこことか、ここらです（佐伯に譜面を見せる）」

佐伯「なるほどな。ちよつと見とくわ」

高志「あと、コーラスも入れられます？」

佐伯「なかなか無茶振りしてくるな」

高志「入れられるとこだけでもいいんで」

巖雄「高志君入ってくれて、バンドがグレードアップしてきたな！」

高志「え：」

巖雄「いや、頼もしい助っ人に入ってもらえてよかったわ」

巖雄の笑顔を見て、嬉しくなる高志。

○チャペルのドア前 日替わり（日中）

緊張の面持ちで羽織袴姿の巖雄。

そこにウェディングドレス姿の叶愛がやってくる。

思わず目頭が熱くなる巖雄。

表情が緩みそうになる巖雄に対して、

陰しい顔つきの叶愛。

叶愛「チャペルやのになんで羽織袴やねん」

巖雄「ええやないか。これがワシの正装や」

叶愛「ほんまどこまでも頑固やな。で、今日の段取り大丈夫やろな？下手なことせんようちゃんとやってよ」

巖雄「わかつとるわ！」

相変わらず喧嘩腰の叶愛に、涙を隠しキツく返す巖雄。

チャペルのドアが開き、二人光の中へ入場していく。

○チャペル祭壇前 同時刻

緊張でガチガチのタキシード姿の田中。

入場してくる巖雄と叶愛の姿を見て

早々と涙が溢れてくる。

我慢しきれず嗚咽し始める田中。

参列者席で、佐伯、高志、信夫、咲也も拍手を送っている。

巖雄の腕から離れ田中の元へ移る叶愛。

叶愛「なに号泣してんの。早いやろ」

田中「ごめん。でも、かなちゃんとお義父さんが二人で歩いてる姿見たら、なんか感極まってもて」

叶愛「泣けるかどうかは披露宴の余興見てからや」

真剣な表情でまっすぐに正面を見据える叶愛。

○披露宴会場 同日（日中）

披露宴も半ば。

お色直しを済ました叶愛と田中が高砂席に座り、皆に祝われている。

巖雄「こんな日が来るとはなあ……」

佐伯、優しい表情の巖雄を見てしみじみ頷く。

テーブルに座っている巖雄にスタッフから声がかかり席を立つ。同席している佐伯も一緒に立つ。

○披露宴会場 外 同時刻

スーツ姿の高志、信夫、咲也が待っている。

落ち着かない様子のメンバー。

巖雄「みんな今日はよろしゅう頼むで」

咲也「なんやこんな綺麗なところで演奏した事

ないからちよつと緊張してきたわ」

巖雄「あ、あれやるんか？」

佐伯「あれってなんです？」

巖雄「あれや、コンサート前に皆でやるやつ。

円陣組んでエイエイオーみたいなやつや」

佐伯「いやそれはせんでもええです」

巖雄「そうか」

咲也「ええやん！やろうや！」

佐伯「いや、ええ」

咲也「なんでやらのや？」

佐伯「うるさい」

咲也「おいチームワーク乱すなや」

佐伯、絡んでくる咲也の襟元を掴み、

佐伯「余計緊張するやろ」

咲也「あゝ、ああゝ」

○披露宴会場 同時刻

司会「それでは皆様おまたせ致しました。新婦のお父様、鬼熊巖雄様によるバンド演奏のお時間でございます。お父様はこの日の為にギターを始められたそうです。そして短い期間に練習を積まれ、新婦叶愛さんのリクエストされた曲をギターを演奏しながら歌われます。巖雄様のご友人の皆様との素晴らしい演奏をお聞きください。曲はシカゴの『素直になれなくて』です」

会場の明かりが落とされ、バンド席が明るくなる。

緊張の面持ちの巖雄、高志に目配せする。

高志がイントロを弾き始めると会場のスクリーンに訳詞が映し出される。

英語の歌詞を歌い始める巖雄。

スクリーンに映る訳詞『お互い少し離れてい

る時間が必要」と彼女が言った』

『恋人同士でも休みが必要よ。お互いから距離を置くことが』

『今抱きしめてほしい。ごめんって言うのは苦手だから。ただ君にそばに居てほしい』

『二人の間に色々あったけど、必ず埋め合わせする。約束するよ』

『これまでに色々言ったり、やったりしてきた。君は僕の一部なんだ。手放せないよ』

『離れているなんて耐えられない。たとえ一日でも君から』

『遠くに押しやられたくないんだ。たった一人僕が愛する人から』

『今抱きしめてほしい。ごめんって言うのは苦手だから。ただ君にわかってほしい』

『抱きしめてほしい。本当は言いたいんだ。ごめんって。君を手放すなんて出

来ない』

（歌は続く）

和訳を読みながら巖雄の一生懸命な姿に心打たれ泣いている叶愛。

今までで一番熱くなって演奏しているバンドメンバー。

必死にギターを弾き、完璧ではないながらも声を張り上げ熱唱する巖雄。

佐伯のギターソロも格好良く鳴り響く。

高志、メンバーの様子を見ながら嬉しそうに演奏している。

新郎田中も号泣。会場の参列者も涙を拭いている。

× × ×

演奏が終わり会場から拍手が起こる。

会場の照明が明るくなる。

司会「ありがとうございました！素晴らしい

演奏に盛大な拍手をお送りください」

拍手が更に大きくなる。

叶愛、高砂席から巖雄のところへ行き、

巖雄に抱きつく。

直立で手をグーにして涙を堪えようと耐える巖雄。

叶愛「やるやん。見直したわ」

巖雄「なに言うトンや。これくらい大した事
ないわ」

叶愛、涙目で笑って、

叶愛「パパ。ありがとう」

巖雄、とうとう堪えきれず顔をぐしや
ぐしやにして号泣する。

そして叶愛を強く抱きしめる。

バンドメンバーも暖かく二人を見守る。

○高志のアパート前 外 同日（夕方）

佐伯の車が止まり、披露宴帰りの高志
が降りてくる。

高志「ありがとうございました」

佐伯「こちらこそありがとうな。ほんま色々
助かったわ」

高志「いえ…、それじゃあ…」

高志、車から離れようとする。

佐伯「高志君」

高志「はい？」

佐伯「また何かあったらいつでも連絡して」

高志「：はい（笑顔）」

高志、再び背を向ける。

佐伯「高志君！」

高志「はい？」

佐伯「あ：、バイバイ」

佐伯、名残惜しそうに手を振る。

高志もぎこちなく手を振る。

高志の後ろ姿を見送りながら、居ても立っても居られなくなった佐伯、ハンドルをグーで殴り、車を飛び出し高志に駆け寄る。

佐伯「高志君！」

高志「？」

佐伯「何でも相談乗るから」

高志「はい：」

佐伯「あの：、何か困ったことあったら何でも」

も言うてくれ。もし家におるんが辛いんや
ったらウチに来てくれてもええ」

高志「…え？」

佐伯、思わず高志の両肩を掴み涙目にな
りかけている。

佐伯「な、高志…」

高志「佐伯さん…」

高志、真剣な佐伯の表情にただならぬ
ものを感じ何か言いたげに見つめる。

そこに徒歩で帰ってきた義輝。

厳ついセダンの横に佐伯と高志の姿を
見つけ、高志がヤクザに絡まれている
と思い慌てて駆け寄る。

義輝「ちよ、ちよっと！何してるんですか！」

義輝、高志を佐伯から引き離し、後ろ
に隠す。

義輝「あ、あなた誰ですか！？」

佐伯「あん？」

高志「いや、ちよっと…」

誤解を解こうとする高志。

義輝 「大丈夫やから」

無理やり高志を自分の後ろに押しやる
しかし佐伯にサングラス越しに直視さ
れ、怯む義輝。

佐伯 「そっちこそ誰や？」

義輝 「ぼ、ぼ、僕は、この子の父親ですけど」

佐伯 「父親ア？あー、まりの旦那か」

義輝 「え？まりとどういう関係ですか！？」

佐伯 「どういう関係い？」

佐伯、サングラスを外し義輝ににじみ
寄る。

義輝、足がガクガク震えてくる。

佐伯 「幼馴染や」

義輝 「え：？た、高志君に何の用ですか！」

高志、自分を庇いながら声と足を震わ
せている義輝を見つめる。

まり 「賢ちゃん！」

声を聞きつけてベランダから顔を出し
ているまり。

○高志のアパート 玄関 同時刻

きちんと揃えて脱いだである高志と佐伯の靴。

義輝 M 「ああ…、親愛園の時の…」

○高志のアパート ダイニング 同時刻

佐伯と高志、義輝がダイニングテーブルで向かい合って座っている。

まり、居間で空にヘッドホンを付けてスマホでアニメを見せる。

まり 「ママたちお話するからこれ見てちよつと待っててな」

まり、そう言いながら義輝の隣に座る。

佐伯、煙草を取り出して口に咥える。

まり 「賢ちゃん、ごめん、うち禁煙」

佐伯 「あ、ああ…」

佐伯、煙草を置いて出された麦茶をグビッと飲む。

まり 「賢ちゃんがこないだ、たまたま、偶然うちの弁当屋に来たんよ」

義輝「そうやったんや：」

まり「で、めちゃくちや久しぶりやなあて話してて、その時に高志に賢ちゃんのやってるバンドの手伝いに来て欲しい言われて。バイト代出るからいうて行ってたんや」

義輝「いつから？」

まり「半月前くらいかな：」

義輝「ふーん：知らなかったわ」

まり「あ、ごめん。言うてなかったかな：」

義輝「：せやけど、バイト言うて、高志君をこ、こんな：人：と、一緒にバンドさせてたん？」

まり「賢ちゃんは、こう見えてちゃんとした人やから大丈夫」

佐伯「おうよ」

義輝「ちゃんとて：」

義輝、佐伯の姿をまじまじと見る。

義輝「いや、どう見ても極道やん！」

まり「ちゃんとした極道やねん！」

高志「極道の人やから何なん？別に悪いこと

させられてたわけちゃうし」

義輝「せやけど、もし危ないことに巻き込まれでもしてたら……」

佐伯「そんな事にはならんから」

まり「まあ……、そら、そんな事が絶対ないとは言ひ切れへんかもしれんけど……」

高志「別に何もなかったんやからええやん」

義輝「高志君はまだ子供やからわからんのや」

高志「はあ？もう今年で二十歳になるし。いつまでも子供扱いせんというて」

義輝「いや、そうやなくて、僕は高志君の事を心配して……」

高志「ほんまの父親でもないのに父親ヅラせんというて！」

まり、思わず立ち上がり高志の頬を叩く。キツとまりを睨む高志。

まり「高志、そんな言い方はあかん。あんたもつと優しい子やったやん」

高志「別に俺は優しいし。父親とか……、自分ら二人で勝手に決めた事やん」

気づくと空が心配そうにまりの足に抱きついている。

慌てて空を抱き上げるまり。

まり「空どうしたん？アニメ見いひんのん？」

高志「どうせ俺が邪魔やったんやろ」

まり「なんでそんなこと言うん！」

義輝「そんな事ない！勝手に決めたて、そう思わせてもてたんやったら、それはごめん…、悪かった。でも高志君の事邪魔やなんて一回も思たことないで！」

空「ふえーん」

ただならぬ空気を感じ泣き出す空。

まり「あー、空、大丈夫やで」

義輝「空、ごめん、大きい声でびっくりした？」

まりが抱いていた空を義輝が抱き直す。

その三人の様子を見て、

高志「その家族に…、俺はおらん…」

まり「え？」

高志、ガタンと椅子を倒し立上がる。

高志「なあ、佐伯さんが、俺のほんまのお父

さんなん？」

まり「え？」

佐伯「え？」

義輝「・・・？」

まり「ちやうよ」

高志「ほんまの事教えて。もう何もごまかさ
んといて、俺もうちっちゃい子供とちやう
ねんで！」

まり「ごまかしてへんて！ほんまに違うんや
て。なんでそうなるん？」

高志「佐伯さんが、そない言うtotた」

佐伯「えー！？俺！？？」

まり「賢ちゃん、何いい加減なことを言うてん
のん！？」

佐伯「別に俺そんな事、まだ言うてへんで」

高志「お母さんとすごい親しかったみたい
言うてたし。つきあってたんかって聞いた
らなんか動揺して濁してたし」

佐伯「そ、それはやなあ……」

高志「それから俺と性格が……似てるて……」

まり「性格？そんなたまたまやろ」

佐伯「でも、高志君の几帳面さは俺の血なん
ちやうか？せやかて見てみい、玄関。ちや
んと靴揃えとんのん俺と高志君だけや
で？」

まり「はあ？そんな事？」

佐伯「そんな事で！」

まり、椅子にドサツと座り直し、

まり「もうええわ。確かに、昔私は賢ちゃん
とつきおうてました。いや、一緒に暮らし
てました。二十歳頃から二年程の間やった
かな」

佐伯「：そうや」

まり「せやけど賢ちゃん、よおー思い出して
み。別れる前、半年近くほとんど家帰って
こんかったやん。組がなんやア言うて、ず
ーっと若頭について回ってて、どこ行っと
ったんか知らんけど、ふん（笑）子供出来
るような事ありましたかーいうねん！」

佐伯「：え：」

冷ややかな目で佐伯を見る高志と義輝。

まり「それが理由で分かれたアいうのに、高

志が賢ちゃんの子なわけないやん」

高志「佐伯さん…、それほんまですか？」

佐伯「え…、そうやったかいな…」

義輝「ほな、高志君は…」

まり「賢ちゃんがめったに帰ってこんから淋
しいて相談乗って貰ってた人がおってん。

賢ちゃんと別れた後その人につきおうて
たんや。でもその人つきおうてそんなせん
うちに死んでもたんよ。組の出入りで」

佐伯「なんや！うちの組のモンやったん
か！？誰やそいつ？」

まり「賢ちゃん、多分覚えてないと思うわ。
組入り立てのめっちゃ下っ端やったから」

佐伯「…ほなら…、高志君は俺の甥っ子みた
いなもんやないか」

まり「はあ？」

佐伯「兄弟の子なんやから。な？」

義輝の同意を求める佐伯。

なんとなくそうなのかなと頷く義輝。

高志「ほんまの父親は死んどったんや：」

力が抜け足元がよろめく高志。

まり、駆け寄り高志を抱きしめる。

まり「今まで黙っとってごめん。確かに高志

も今年二十歳やもんな。もう大人や。ほん

まの事話してもええ年やったな」

高志「・・・」

まり「いや、遅かったくらいか。そんな辛い
思いしてたなんか：気づかんでごめんな」

まり、涙ぐむ。義輝も空を抱いたまま、

まりと高志の肩を抱く。

佐伯、少し残念そうながらも、うんう
んと頷き、

佐伯「まあ、お幸せに」

と、島野家を出る：前に玄関の全員の
靴を揃える。

○高志の部屋 同日（夜）

高志、ピアノの前に座って人差し指で

鍵盤を押しながら何か考え込んでいる。

コンコンとノックの音。

まり「高志？」

高志「…なに？」

パジャマ姿のまり、ドアを開けて覗く。

まり「大丈夫？」

高志「何が？」

まり「その…色々と」

高志「別に、大丈夫」

まり、部屋に入ってベッドに座る。

まり「ちよっと衝撃的な内容やったやろ？」

高志「別に、大したことない」

まり「ほんまに？でも、もうこれからは何も

隠すことないし何でも話すから、高志も何

でも話してな」

高志「…うん…」

まり「まあ…、お年頃の子はそうもいかんか」

手持ち無沙汰にベッドのシーツを撫で

るまり。

高志「その死んだお父さんってどんな人やっ

たん？」

まり「せやなあ。とにかく優しい人やったわ。組でやっていけるんか心配やったくらい。私がイライラして文句ばっかり言うてても、黙ってうんうんて話聞いてくれてた。私も若かったし、はちやめちゃんな事ばかり言うてたのに、自分の事より私の事ばかり心配してくれてたなあ。で、几帳面やった（笑）」
少し笑顔を見せる高志。

まり「几帳面なところは高志がちゃんと受け継いでるなあ。お母さんはズボラやからな（笑）：で、その人が死んでもてから高志がお腹におることがわかってん」

高志「そうなんや？なんで俺の事産んだん？」
まり「そら、初めは悩んだで。まだ二十二やったし、ちゃんと育てられるか不安やったから。でも、一人ぼっちやった私と一緒に生きてくれる存在がここ（お腹に触れて）にあると思ったらものすご愛おしなつて

な。この子を幸せにする為に人生を捧げよう！って思たんや」

高志「そうなんや…」

まり「せやからな、義輝さんと結婚したんも、もちろん義輝さんがええ人で好きやったからやけど、これからの高志の人生と一緒に助けて貰えるていう下心があつたからなんやで」

まり、イヒヒと笑って見せる。

高志「そうやったんや…」

まり「それにしても今日の義輝さんは、ちょっと意外やったわ」

高志「なにが？」

まり「賢ちゃんの前に立ちはだかってたやん。足ガクガクいわして。あんな事出来る人とは思わんかった」

高志「声も震えてたで」

まり「あははは、そうやねん、義輝さんて道歩いって酔っ払いとかに絡まれても、こっち悪ないのに『すんませんすんません』

言うてその場をやり過ぎすタイプで、どっちか言うといざという時は私が守ったらなあかんと思ってたくらいやったのに」

まり、高志の枕を整えながら、言葉を噛み締めるように、

まり「怖いのが我慢して高志の事守ってくれたんやなあ……って」

高志「……」

まり「意外と男やったんやな思た。まあ、もう今日は疲れ果てて寝てもてるけどな」

そう言っ立ち上がり、

まり「ほな、私も寝るわー。おやすみ」

まり、部屋を出ていく。

高志、まりの座って居た場所へ行き、寝転がり、義輝が佐伯の前に立ちはだかっている姿を思い出しクスツと笑う。

○ショッピングモール 冬 日替わり（日中）
高志がショッピングモールの入口で立っている。

そこへ千林がやって来る。

千林「島野君、はや！まだ待ち合わせ時間の

7分前やで」

高志「別に、ええくらいやん」

千林「まあ、島野君やからな」

高志「なにそれ」

千林「ほな行こか！楽器屋さんでええの？」

高志「うん。楽器屋にあると思う」

○ショッピングモール 店内 同時刻

店内はクリスマスの装い。

並んで歩く高志と千林。

千林「クリスマスムード満載やなあ。ところ

で、これってデートなん？」

高志「え？いや別に。こういうところに一人で

来たことないから誰か付き添いが欲しか

っただけやけど」

千林「ふうーふうーん」

千林、高志の顔をじーっと見る。

千林「あたしは付添人かあ」

高志「え？」

千林「じゃあさ、こうしたらデートになるんじゃない？」

千林、高志の腕に自分の腕を絡める。

思わず反対側に仰け反り固まる高志。

千林「ちよっとお、嫌がらんといてよお、失礼な！」

高志「いや別に、びっくりしただけやし」

千林、高志をじっと見て、

千林「という事で、今日はデートって事でいいですか！？」

高志「別になんでもいいけど」

千林「ああ（落胆）、やっぱり島野は島野や

あ。ピアノ以外は暖簾に腕押し糠に釘、豆腐にかすがい島野に腕組みやあ」

高志「なにそれ？」

千林、フツツと笑い、

千林「まあえつか、そういう島野君が！」

高志「あ、あった！」

高志、楽器店の前のおもちやのピアノ

を指差す。

高志「これこれ」

駆け出す高志の腕を掴んだまま付いていく千林。

千林「ほんまやあ、かわいいく！」

おもちゃのピアノの前でしゃがみ込む二人。千林、鍵盤を人差し指でつつつき可愛い音を鳴らす。

千林「空ちゃん喜ぶね」

高志「喜んでくれたらええけど」

千林「そら絶対喜ぶよ。めっちゃ素敵なクリスマスプレゼントやん！」

千林、人差し指でジングルベルを弾く。その横顔を嬉しそうに見つめる高志。千林、それに気づいて高志の方へ顔を向け、いたずらっぽく、

千林「なに見てんのん？」

高志、間近にある千林の綺麗な顔から目を離せず、

高志「え：」

千林「可愛すぎてチューしたなった？」

高志、千林の目を見つめる。

一瞬時が止まったかのように見つめ合う二人。

千林、高志のおでこを人差し指で突いて、

千林「まだ早いわ」

転びそうになる高志。

高志「ちよっと」

千林「場所が悪い」

笑いながら立ち上がり、高志の手を掴んで引っ張る。

千林、おもちゃのピアノの箱詰めされた商品を高志に渡す。

千林「はよ買いに行こ！」

千林、高志の手を引いてレジに向かう。引っ張られながら千林の手の温もりを感じる高志。

○ショッピングモール 同時刻

高志達がいる同じショッピングモールのベビー用品売場。

巖雄と叶愛と田中が買い物をしている。
妊娠7ヶ月の叶愛。

ピンクでフリフリのベビー服を指差し、

巖雄「これがええんちゃうか？」

叶愛「えー、可愛すぎや、もちよっとシンプ
ルな方がええ」

巖雄「そやかて女の子なんやから、かわいー
にしたりたいやないか」

叶愛「そんなフリフリとちごて、こっちの方
が可愛いわ」

巖雄「それはちよっと可愛さが足りんやろ」

叶愛「十分可愛いって！」

巖雄「いや、こっちの方が……」

巖雄、もっとフリフリの服を見せる。

叶愛「なんでやねん！だからフリフリはちや
う言うとうやろ！」

田中、喧嘩になりそうになっている二人
人を見て大声を上げる。

田中「あ！やだ！なにこれえ！ちよつとお！
この靴チヨ―可愛くなあい？」

巖雄、叶愛が田中の持っている小さな
赤ちゃん用の靴を見る。

巖雄・叶愛「か、かわいいいいいいい」

とろけそうな表情になる二人。

叶愛「なにこの小ささ。可愛すぎるう」

巖雄「なんやおちよこみたいやないかい」

叶愛「いや例え方！」

田中、そんな二人を嬉しそうに見守る。

○河原か公園のような緑地 日替わり（日中）

高志と佐伯が歩いてきてベンチ等に二人
人並んで座る。

佐伯「相変わらず靴揃えとんのか？」

高志「なんですかそれ」

佐伯「俺は…、揃えとる」

高志「俺も揃えてますよ」

佐伯「そうかあ。ほなこれやるわ」

佐伯、袋からみかんと除菌ウェットテ

イッシュを出し高志に渡す。

高志「え？」

佐伯「今日は誰に気兼ねもなく剥いて剥いて剥きまくれるで」

佐伯ウェットティッシュで手を拭く。

高志「フフ、そうですね」

佐伯、おかしそうに笑う高志を見て、

佐伯「あれから家族とも、うまい事いっとんか？」

高志「まあ、それなりに」

高志、ウェットティッシュで手を拭いてからみかんを剥き始める。

佐伯「そうか」

佐伯もみかんを剥き始める。

高志「でも、まだお父さんて呼ぶタイミンがない」

佐伯、フツと笑って、

佐伯「その言葉、聞いたらそれだけであいつ泣いてまいよるんちゃうか」

高志「え？」

佐伯「まあボチボチでええやん。ボチボチで。

何も焦らんでもどうせ家族なんやから」

× × ×

仲良く買い物をする巖雄と叶愛。そし

て田中。

× × ×

じゃれ合いながら道を歩く信夫と咲也。

× × ×

仲良く料理を作る桐山と美晴。

× × ×

佐伯「俺は一人もんやから、気楽なもんやけ

どな」

高志「佐伯さんは俺の叔父さんなんでしょ？」

佐伯「え？」

高志「それで言うたら兄弟たくさんおるんち

やうんですか？」

佐伯「ああ…、まあな…」

高志「そしたらつまり、親分は佐伯さんのお

父さんですか？」

佐伯「…まあな」

高志「そしたら叶愛さんも兄妹ですか？」

佐伯「それは：ちよつと違うけど」

高志「信夫さんが弟分なら、その弟の咲也さんも佐伯さんの弟になって、他の組の人達も入れたら家族めちやくちやいるじゃないですか！」

佐伯「ま、まあ：ある意味な」

一生懸命話す高志を見て照れながら、
高志の顔を見ず、ぐしゃぐしゃと頭
を撫でる佐伯。

佐伯「ありがとう」

高志「え？」

佐伯、大きく息を吸い込み、

佐伯「おい！甥っ子！みかん、まだ白いところ
ようさんあるぞ」

高志「（自分のみかん見て）え？」

佐伯「まだまだやり尽くすでえ」

高志「うん！」

佐伯「あ、そう言えば親分がまたバンドやり
たい言うとったな」

高志「え？ほんまですか？」

（エンディングに入っていく）

佐伯「ギター、もつとええやつ買おかな言う
とったし……。次はグループサウンズやりた
いとかも言うとったな」

高志「グループサウンズ？」

佐伯「スパイダーズとか、タイガースとか」

高志「野球チーム？」

佐伯「ちやうて、知らんのか？あんな……。お
い、皮向く手が止まつとるで。おっ、俺の
んはだいぶツルツルなってきた」

高志「いや、この辺まだでしょ」

佐伯「え？これ剥いたら汁出てまうやろ」

高志「それをうまいこと剥かんと……」

二人、もくもくとみかんの皮を向きな
がら話し続ける。

おわり